総 説

巻 頭 に よ せ て

安 田 幾 久 男*

Preface

YASUDA Kikuo*

軽金属研究会誌軽金属第10巻の巻頭に際し所懐の一端を述べてお慶びの言葉に代えたいと思います。

昨年は各産業界とも極めて好調裡に終始し洵に活況を呈しましたことは御同慶に堪えません。

わが軽金属工業もアルミニウムの需要は稀に見る大巾な増加を示し、生産が需要に追いつかないと云ううれしい年に終始し、しかも将来性のある産業の一つとして一般から認識され、またマグネシウム工業においても、工業生産再開後わずか3カ年間に過ぎませんが従来の用途の外に防食陽極用その他の新用途が開け、前途に大きな期待を持たれるに至つたのであります。

この盛況は申すまでもなく、当業界ならびに需要産業界の諸賢の過去10有余年に亘る基礎的技術研究による成果の賜であり工業資材として如何に重要なものであるかを深く御認識され、一体となつて各種構造材、機械などに軽金属を使用することによつてその性能が改善され、輸出の伸張も期されるという信念の下に生産技術の向上を図り、用途開拓に御協力された結果であると感謝致している次第であります。

お陰をもつて、昭和34年度においては業界が永い間待望していたアルミニウム地金年産10万トンを突破したのでありまして、この意味において、丁度本年度はこれまでの成果を基盤に次の段階20万トンあるいは30万トンへの出発点となると確信するものであります。

すでに昨年来製錬の一大増産準備と共に加工部門においてもこれまでに見られない多量生産体制を着々と推し進めており、誠に力強い限りであります。

また今年は「黄金の1960年」とか「1960年代の繁栄」とかいわれておりますが、しかしこのように恵れたこの拡大均衡も常に平坦な途ばかりとは決していうことができないわけでありまして幾多の試練があると思います。特に本年度から貿易為替の自由化の実施が始まり、国際市場での競争に対処する試練の年ともいえ、十分な力を養う必要が痛感される次第でありまして、その競争力と繁栄は増産と共に益々経営の改善向上を計ることにあるはもとより、技術革新による技術水準の向上等生産性向上に負う所多大であると存じます。

研究会々誌もここに第40号を発刊するに至り、また研究大会も昨秋には第17回を数えるに至りましたが、会員諸賢の支援により、共に益々内容も充実的してまいりました。会員諸賢には今後共この研究会を充分に利用願い、技術の交流を計ると共にその目的遂行に努力されるよう念願し、また業界発展と研究会の発展育成のため一層の支援を御願いする次第であります。

* 軽金属協会会長 President, The Light Metals Society